

山口元樹、『インドネシアのイスラーム改革主義運動——アラブ人コミュニティの教育活動と社会統合』慶應義塾大学出版会、2018、ix+282p.

東南アジア島嶼部にはアラビア半島南部ハドラムウトからの移民（その子孫も含めてハドラーミと呼ばれる）が居住しているが、同様に移民コミュニティを形成した華人ほどの注目を集めなかった。それは、絶対数が少ないのに加え、ホスト社会の住民と同じイスラームを信奉して、「摩擦」が少なかったこととも関係があるだろう。特に日本人にとっては、華人が巨大な中国とのつながりで身近な関心事となるのに対して、アラビア半島は異質で遠い世界に感じられてきたこともあるだろう。それゆえに、アラブ系住民がホスト社会で果たした役割はあまり認識されなかった。

本書は、国民国家形成期のインドネシア（植民地期はオランダ領東インド）におけるアラブ系住民が設立した団体イルシャード（「導き」を意味する）の教育活動を通して、外来系住民の社会統合の問題を論じている。著者は、学部時代に東洋史学科でイスラーム史を学ぶ中でアラビア語文献解読の訓練を受け、その後大学院で東南アジアのアラブ人に関心を持つようになり、インドネシアに留学したという。イスラーム研究者としても東南アジア研究者としてもやや異色の道りを経て本書のテーマに辿りついている。それはインドネシア語の定期行物・文献のみならず、従来植民地期研究で使用されるオランダ語の植民地文書・文献に加えて、アラビア語の定期行物・歴史書等を史料とするという手法でインドネシア史に接近したことに反映されている。このようなアプローチでインドネシアのイスラームを扱う研究者は世界でも数えるほどしかない。また、東南アジアのアラブ人に関する研究は海外ではそれなりにあるものの、体系的に扱ったものはまだ限られている。本書はインドネシアのアラブ系住民史を本格的に扱った先駆的な作品と位置付けられる。

本書の構成は以下のようになっている。

序章 問題の所在——インドネシアのイス

ラーム改革主義運動とアラブ人の社会統合

- 第1章 イスラーム改革主義運動の源流
- 第2章 イスラーム改革主義運動の始まり
- 第3章 インドネシア・ナショナリズムの形成
- 第4章 アラウィー・イルシャーディー論争の収束
- 第5章 ハドラムウトかインドネシアか
- 第6章 独立後のインドネシア社会への統合
- 終章 インドネシアにおける統合の原理としてのイスラーム

序章では、植民地期インドネシアにおけるアラブ系住民の歴史を特にイスラーム改革運動との関わりで概観したあと、先行研究を整理して本書で扱う課題を明言している。それによると、ここ20年ほどインドネシアのハドラーミの存在は研究者の関心を集めているという。前近代において「（東南アジアの）アラブ人は移住先の社会と深く混淆し、複合的なアイデンティティを持った」（p. 13）。それに対し、「近代になると、植民地国家が領域、人種、エスニシティといった概念を明確化し、それが個人のアイデンティティを規定するようになった」（pp. 13-14）。東インドの住民区分では、アラブ人は「外来東洋人」に分類され、「原住民」すなわちプリブミ<sup>1)</sup>とは異なる法や社会制度が適用された。植民地期のイルシャードを詳細に論じたモビニ＝ケシェー [Mobini-Kesheh 1999] は、このように制度的な枠組みに規定されるようなアイデンティティが形成されるようになったという観点から、イルシャードを捉えた。そのため、その教育活動は植民地の公教育制度からほとんど分離し、中東が志向された結果、インドネシア人とは異なるハドラーミとしての意識が育まれたと結論付けた。

しかし著者は、アラブ人社会がホスト社会から分離していく動きを中心にしたこの議論に疑問を呈した。独立後に多くのアラブ人がインドネシアに留まることを選択したことの説明がつかないか

1) マレー系の先住民。独立前は通常「ブミプトラ」と呼ばれていた。

らである。従来の研究と同様に移住アラブ人が中東アラブ地域との緊密なネットワークを有することを重視したうえで、著者はふたつの課題を提示した。第1にイスラーム改革主義団体としてのイルシャードの教育活動を考察し、その中に指導者であるスーダン出身のウラマー（宗教学者）のスールカティーを位置付けること。第2に、それを通してアラブ人コミュニティがホスト社会に統合されて行く過程とその要因を検証することである。かくして本書は、「イスラーム改革主義」の東インドへの波及を再検討するとともに、発祥地から離れた地でその運動がどのように展開するのか、つまりウラマーが宗教教義と自らを取り巻く状況とどう折り合いをつけるのかというその営為を描くことになる。イスラーム世界におけるウラマーのネットワーク、あるいは著者の言葉を借りれば「超地域的イスラーム改革主義運動という文脈」(p.28)が重視されると同時に、東インドという現場の状況が再構築される。以下、章ごとにその内容を要約する。

第1章では、イルシャードの設立者となるスールカティーの学問的背景が明らかにされる。イスラーム改革主義はエジプトから始まるが、伝統的なイスラーム学が教授されるヒジャーズ（マッカ、メディナ）でも、19世紀後半にはイスラーム改革主義につながる教育体系を有するマドラサ（西欧近代式のイスラーム学校）がインド人ムスリムによって開設された。ヒジャーズには多くの東インド出身のムスリムが学んでいたが、彼らもこのマドラサに関心を寄せていた。スールカティーは19世紀末からヒジャーズでイスラーム改革主義の流れにある学問を習得したが、その学識は伝統的イスラーム学の最高学府ハラーム・モスクでの教授資格を獲得するほどであった。さらに、教育改革運動にも関わり、マッカと東インドをつなぐ学問のネットワークを通して東インドへ渡ることになった。

第2章では、東インドでのイスラーム改革運動が、アラブ人コミュニティに始まることが述べられる。19世紀末から東インド内外の要因、特に中東アラブ地域からもたらされたイスラーム改革主義がアラブ人の覚醒を引き起こした。1901年頃ハドラーミ商人によってバタヴィアに設立された

ジャムイーヤト・ハイルは、いち早くマドラサの開設に取り組んだ。しかし、アラブ人覚醒の動きは、ハドラーミたち間で指導的な立場にあったアラウィー（預言者ムハンマドの末裔）の権威に挑戦する運動も生み出すことになった。アラウィーは、ハドラーマウトで社会階層の最上位に位置していたが、移住地の東南アジアでは出身階層に関わりなく、「アラブ人」として一括りに扱われた。1911年スールカティーは、ジャムイーヤト・ハイルの学校の教員として東インドに招聘されたが、ムスリム間の平等を唱えてアラウィーの反発を呼んだ。スールカティーをはじめとする改革主義者はジャムイーヤト・ハイルの教師職を辞し、1914年に彼を支持するハドラーミたち（イルシャーディーと呼ばれる）とともにイルシャードとその学校を設立する。イルシャードの学校ではプリブミのムスリムも学び、イスラーム運動の指導者となるプリブミが輩出することとなる。

第3章では、倫理政策下のプリブミとアラブ人の関係が述べられる。東インドでは新しい公教育制度が発進し、1920年代までに初等教育から高等教育までを備えるようになった。当初、アラブ人は公教育に対して否定的な態度であったが、スールカティーは1919年にイルシャードの学校にオランダ語を教授用語とするエリート初等教育プログラム導入を提案した。プリブミ子弟の要望にこたえるためにイルシャードの学校を公教育制度に対応させることを意図したのである。アラブ人のみならずプリブミも受け入れようとした「平等主義」に基づいたものであったが、順調には実現しなかった。また、相次いで誕生したイスラーム諸団体が参集する東インド・イスラーム会議が1922年から断続的に開催され、アラブ人もこれに参加した。プリブミ意識の高揚でアラブ人は周縁的な立場に追いやられるという曲折はあったが、ムスリムの国際会議への東インド代表選出議論では中東アラブ地域とのネットワークやアラビア語能力を買われたり、代表派遣の資金援助を行ったりして、アラブ人コミュニティ側はその存在感を示した。スールカティーは代表に選出されるも辞退したが、カリフ制をめぐる議論においてはアラブ人優先主義を排する論陣を張った。アラブ人であれ

プリブミであれ、すべてのムスリムがイスラーム共同体の対等な立場の構成員であるという「平等主義」を貫いた。

第4章では、イルシャーダ結成の背景となったアラウィー・イルシャーディー論争が詳しく述べられる。1930年代前半の争点は当初問題になったアラウィーの優位性にまつわる慣習とは異なり、尊称“サイイド”が預言者の子孫だけに限定されるべきか否か、および（東インドの）アラウィーたちの預言者の子孫としての系譜は妥当か否かであった。東インド外のウラマーに「仲裁」要請がなされ、エジプトの東洋連盟、国際的に著名な改革派のウラマーであるラシード・リダーとシャキーブ・アルスラーンが見解を示して両者の和解を求めた。中東の改革派ウラマーは、これをハドラーミー・コミュニティ内の問題ではなく、サイイド・シャリーフの特殊性をめぐる普遍的な問題として論じた。裁定はイルシャーダ側に不利なもので、スールカティーたちはその受け入れを拒んだ。しかし、その間にアラウィー側もすべてのムスリムが対等な立場であるという改革主義者の考えを受け入れるようになっていた。またイルシャーダ側も反アラウィーの姿勢を弱めた。

第5章では、1920年代末以降にアラブ人コミュニティ内に起きたアイデンティティをめぐる葛藤と、その中でイルシャーディーの教育活動の志向性に生じる変化が描かれる。アラブ人コミュニティ内の論争が収束しつつあった1934年、アラブ人の団体として初めてインドネシア・ナショナリズムを掲げるインドネシア・アラブ協会が誕生した。現地生まれのアラブ人の多くはプリブミのムスリム社会への同化をめざしたのであるが、「ハドラーマウト志向」の立場をとるアラブ人はこれに強く反発した。一方、アラブ人コミュニティの教育活動は制度化が遅れており、生徒に社会的上昇の機会を十分に提供できていなかった。エジプトへの留学生の派遣と東インドでの公教育制度の活用とふたつの方向で模索が続き、後者についてはオランダ語アラブ人学校が誕生した。そのような中、スールカティーの言説にも変化が生じた。アラブ人とプリブミの連携を重視し、インドネシア社会の中で教育活動を発展させていくべきだと「現地

志向」を強めるようになった。ただし、アラブ人の帰属意識は依然として流動的であった。イルシャーダはインドネシア・アラブ人協会とは異なり、アラビア語をアラブ人性の主な要素と見做していた。しかし、アラビア語教育と植民地の公教育の両立には大きな困難が伴った。

第6章では、日本軍政を経て独立するという激変のインドネシア社会で、アラブ人の位置も大きく変わっていくことが述べられる。日本軍政下にイルシャーダの支部や学校は閉鎖され、アラブ人が教育活動をホスト社会の「進歩」に適用させようとしてきた努力は無に帰し、しかもハドラーマウトとの関係は断絶された。独立後、多くのアラブ人はインドネシア国籍を取得した。国家形成においては、イルシャーダはイスラーム政党マシュミと協力関係を構築し、インドネシアのイスラーム団体としての地歩を固めた。また、教育の二元的改革では、宗教学校系統ではなく、一般学校系統を教育活動の中心とすることを選択し、教授用語をアラビア語ではなくインドネシア語とした。イルシャーダは「アラブ人」や「ハドラーミー」を表に出さなくなり、ホスト社会への統合が1950年代に完成した。

終章では、本書の二つの課題が検証されたことが確認される。まず、イルシャーダのイスラーム改革主義的性格が明らかにされた。その指導者スールカティーは「平等主義」を強調し、アラブ人とプリブミの対等な立場での協力関係を主張したが、それが最終的にイルシャーダのホスト社会への統合へと導いた。さらに、インドネシアの国家建設と社会統合において、アラブ人とプリブミの間でイスラームが社会的な紐帯、統合の原理としての役割を果たしていたことが強調される。

本書は慎重に議論を進めているために、やや複雑な論理展開をしている印象を受けるが、イスラームについては改革主義やその「超地域性」、また教育に関しては「巡礼」<sup>2)</sup>とその二つの方向（東

2) ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』[2007]で提唱したところの、官僚や就学者が出身地から地方の中心地へ、さらに首都へ向かう旅、行政や学校制度の生み出す「巡礼の旅」のこと。

インド国内と広いイスラーム圏)をキーワードにすれば読み解きやすい。本書の学術的貢献は次のようにまとめられる。

第一に、先行研究をくまなく精査したうえで、定説に反論していることである。先行研究ではアラブ人コミュニティが東インドの新しい教育制度と距離を置いていたとされたが、これは第2章でジャムイーヤト・ハイルやイルシャードがオランダの教育体系に適合した学校建設を何度も試みたことを実証することにより、否定された。なお同章では、イルシャードの教育活動を位置づけるために倫理政策下の教育制度が体系的に示されたが、今までこのように精緻に検証する努力はなされなかった。アラブ人コミュニティの教育活動のみならず、倫理政策下の教育制度を考察する際に有用な説明を提供している。

第二に、本書はいくつもの新しい知見をたらしめた。スールカティーは、植民地期インドネシアのイスラーム改革運動の「先駆者」として必ず言及されるが、本書によってはじめてその思想背景が描き出された。そもそも、同じイスラーム改革派とされる主流派団体ムハマディヤについては、その創始者であるアフマド・ダフランがどのようにして改革思想を獲得したかさえ、まだ解明されていない。それゆえに、イスラーム改革思想の源流を突き止めた意義は大きい。また、第1章でメッカでのイスラーム改革主義の動きに言及しているが、これは中東・イスラーム研究者もそれほど関心を向けないう。興味深いのは、このマドラサは英領インドのウラマーによって開設されており、それに東インドからのムスリムが強い関心を寄せたことである。非アラブ人ムスリムがヒジャーズでの教育活動にイニシアティブを發揮したという、ヒジャーズの学問のあまり注目されない側面を明らかにした。さらに、第4章のアラウィー・イルシャーディー論争も、初めてその内容が詳しく紹介された。中でも、当時イスラーム改革を牽引するエジプトのラシード・リダーなどの「権威ある見解」をスールカティーたちが容易に受け入れなかったことも、注目に値する。イスラーム法学は現場のコンテクストが重視されてそこでの知的営為が勝負となる。法学議論の奥深さの一端を

垣間見ることができる。このような新しい知見はいずれもアラビア語文献の精読から明らかにされた部分である。

イスラームを主たる研究対象とする場合、思想・観念に拘泥すると地域の事情を軽んじてしまう。逆にオタク的な地域研究をするとひとりよがりによりイスラームの「変種」を作り出しかねない。イスラームそのものに関する知識とアラビア語の素養を習得したうえで、地域のコンテクストを踏まえてイスラームを考察する、この長年要求されている手法上の課題に、果敢に取り組んだ研究がやっと日本でも出版されたことを歓迎する。イスラームを考えることは、地域研究に欠落しがちな比較、交流という視点の必要性を喚起させることになることが改めて示された。さらに、イルシャードの一世紀を通して、インドネシアの国民統合の知られざる一側面が明らかにされた。

このように堅実な手法に基づく労作ではあるが、アラブ人コミュニティが東インドのホスト社会に適応する試行錯誤を繰り返した経緯に説得力をもたせるには、説明不足の感は否めない。まず、アラブ人コミュニティとプリブミとの関わりが断片的にしか見えない。教育活動、東インド・イスラーム会議のほかにも日常生活でプリブミとの接点はなかったのか。スールカティーはマレー語もオランダ語もできなかったというが、ムスリムの国際会議の東インド代表の候補者として名前があがるほど信頼を得ていたのであれば、プリブミのウラマーとの交流についてもう少し詳しく言及することはできなかったのか。それらに言及することも「イスラームが社会的紐帯としての役割を果たした」という著者の主張をさらに補強するであろう。また、イスラーム改革思想の中核が「平等主義」であり、スールカティーもそれが一貫していることが強調された。しかし、アラブ人優位主義を排したり、ハドラマウトへの固執を排してプリブミとの融和を説いたりしたのも、スールカティーが非アラブ人であるという特殊な立場も影響したのではないかという疑問も拭えない。

最後に、東南アジア研究でアラブ人コミュニティが研究者の関心をさほど喚起しなかったのは、アラブ人にまつわるなじみのない用語（多くはイ

スラム関係)や人名がこの人々への接近を阻んできたこともあろう。読者の理解を助けるためには、用語リストや人名リストがあった方が親切であったろう。

なお、本書は第17回東南アジア史学会賞(2019年)の受賞対象となったことを付記しておく。

(小林寧子・南山大学アジア・太平洋研究センター客員研究員)

### 参考文献

アンダーソン, ベネディクト. 2007. 『定本想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆; 白石さや(訳). 書籍工房早山.(原著 Anderson, Benedict. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso.)

Mobini-Kesheh, Natalie. 1999. *The Hadrami Awakening: Community and Identity in the Netherlands East Indies, 1900–1942*. Ithaca: Cornell Southeast Asian Program Publications.

富永泰代. 『小さな学校——カルティニによるオランダ語書簡集研究』京都大学学術出版会, 2019, iv+389p.

本書は、インドネシアが蘭領東インドと呼ばれた時代のジャワ島に生きた一人のジャワ人女性カルティニについて、富永泰代が1987年に出した論考以来の研究をまとめ上げた渾身の書と言える。「あとがき」にはカルティニ生誕140年を記念して彼女の誕生日4月21日に刊行されると書かれている。そこには著者のカルティニに対する深い思いが感じられる。研究はもちろん客観的に行われるものではあるが、研究者は研究対象に心惹かれ、愛着を持って資料を求めて調査を行い、資料と対話しながら解釈や分析を行うことで、素晴らしい研究成果を生み出すことができるのではないだろうか。本書は、時には抑えきれないカルティニに寄せる想いの迸りさえ感じられ、著者の研究テーマに対する愛着が行間から読み取れる。研究書で

あるとともに読書の楽しみを感じさせてくれる一冊となっている。その一方で、著者の主張と自説が展開される時に、その思いがやや強く出ている記述があることも否めない。それを研究者のスタイルと呼ぶのであれば、読者の好みが分かれるのは致し方ない。

著者はカルティニについて30年にも及ぶ長期にわたり資料を渉猟し、インドネシアとオランダで調査を行った上で、カルティニが書いたオランダ語の書簡を丁寧に取り込み研究をまとめている。研究の転機となったのは、1987年に編集・出版されたカルティニの全書簡集[Kartini 1987]であった。その書簡集と蘭領東インド時代の1911年にカルティニをよく知り文通相手でもあった当時の教育長官アベンダノンが編集し出版した書簡集との綿密な比較研究は著者によって博士論文として2011年にまとめられている。

本書を構成している全5章は概ねこれまでの著者の研究論文、特に博士論文を基礎としている。序章の第3節「本書の構成」(pp. 24–25)に明瞭に書かれているように、前半の第1章から第3章ではカルティニが生きた時代のジャワ社会とカルティニの「世界認識」(「」は著者による)を、カルティニが受けた教育と読書を中心にして描き出している。特に第3章はカルティニの読書リストを手掛かりとして、カルティニという一人の人物の内面と世界観を描き出して非常に興味深い章となっている。第4章と第5章では全書簡集が出版されて初めて明らかになったカルティニの社会活動や政策提言、特にカルティニが力を注いだ木彫工芸振興活動、伝統社会での女性の地位、教育に関する考え方を中心に論じている。従来の研究ではオランダの倫理政策の文脈の中にカルティニは位置付けられ、1911年版の編集者であるアベンダノンを中心としてオランダ人によって与えられた「近代精神」を体現する「原住民」としての役割を演じさせられてきたとして、それらを批判的に論じる。さらには、カルティニが良妻賢母、民族主義の先駆者、フェミニズムの先駆者、教育家として語られていく言説がどのようにして生み出されていったのか、貴族の名前である「ラデン・アジュン・カルティニ」という呼称を手掛